

編 集 後 記

本年最大の焦點であつた國營移管問題ももめ抜いた結果、捕獲事業は道營で、孵化放流事業は國營でやる事に決りそう。どちらにしても今年のような不漁であつてはどうにもならない問題だ。

師走の忙しさに原稿の出が悪いのではないかと懸念していたが案外澤山投稿され、容易な編集をする事が出来た。今後も多數投稿されるようお願いする。

館脇氏の「千島の思出」は今號で十回を數えるに至つた。田村氏の

「魚の一生」と共に回を重ねるに従つて面白味を増してくる。絶大なる御協力を厚く御禮申上げます。菊地氏の藏書の中から故藤田經信氏の筆になる「鮭の回歸問題」を載せた。前號の「鮭の減耗したる原因について」と共に大いに我々の參考になる事と思ふ。

豫ねてから考えられていた本誌の索引が漸く此の程纏つた。いろいろ問題に亘り掲載されているので見にくい分類となつたがどうぞ御利用の程を。

やがて本誌も三年目を迎える事になつた。振り返つてみると本誌についてはもつとくよいものをと望まれて來た。然しなか／＼理想に到達す

る事は困難でたゞ月を追つて續けられて來たに過ぎなかつた。どうか皆様の御協力を得てきつと三年目には理想までもつて行く考えでおります。本誌と共にきつと良い年を迎えられん事を……。(S)

昭和廿六年十二月十日發行
毎月十日刊行

札幌市外中の島

發行所 北海道水産孵化場

電話③—〇四三九番

魚と卵編集室

